

山古志復興新ビジョン

(中間報告 骨子案)

(抜粋)

平成 1 7 年 2 月 1 0 日

山古志の復興には、日本の国づくりのありようが問われている。

今回の中越地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

山古志の文化やライフスタイルが、まるごと失われる危機

山古志村は新潟県中越地域の山間部に位置し、厳しい自然と向き合いながら、日々の暮らしを営み、闘牛や鯉などの独自の文化を育み受け継いできた村である。近年、高齢化と過疎化が急速に進行しており、いわば日本の中山間地を代表する典型的な地域といえる。

中越地震によって山古志村は、周辺地域とともに壊滅的な被害を受け、全村民が避難を余儀なくされ、今なお仮の地での生活が続いている。加えて、日本有数の豪雪地帯に位置することから、冬期間の復旧作業は停止。また積雪や雪崩による二次災害や、融雪時の出水等によって、被害がさらに拡大することが懸念されている。さらには、全世帯の4割以上が高齢者世帯という環境から、雪解け後の復旧・復興の困難さが予想されている。

被災状況の大きさ、そして再建をめぐる予想される様々な困難など、山古志村は今まさに地域崩壊の危機に直面しているといっても過言ではない。

それは単に山古志村という地域がなくなるだけでなく、美しい棚田の風景を失うといったことでもない、営々と受け継がれてきた地域の文化やライフスタイルそのものがなくなることを意味している。

山古志村の復興の持つ意味

地震災害はどこにでも起こりうる。しかし、その復旧・復興はそれぞれの地域特性に左右される。

阪神・淡路大震災から日本人は多くのことを学び、その知識は今回の中越地震でも活かされた。しかし大都市・神戸の復興の歩みは、山古志村の復興にそのまま置き換えられるものばかりではない。むしろ神戸という大都市とは対極にある中山間地における地震災害からの復興活動として、山古志村の復旧・復興活動を考える必要がある。すなわち、山古志村の復興計画とは、日本の7割を占めるといふ中山間地の地震災害からの復興のモデルと位置づけられる。

しかし、山古志の復興計画の持つ意味はそれだけではない。そこで問われてい

るのは、日本という国が、中山間地域を通してそこに広がる豊かな暮らしや文化を、どのように位置づけ、どのように保全していこうとしているのか、という国づくりの思想であり、意志である。

ちなみに、山古志村の年間生産額はおよそ 40 億円。復旧・復興に必要な公共投資はそれをはるかに上回る。

「村に戻る」という強い村民の希望に応えるために

山古志復興新ビジョン研究会が平成 17 年 1 月から 2 月にかけて実施した調査では、村民の 9 割以上が「村に戻りたい」という意思を示した。私たちはこの村民の意思と希望を最大限に尊重する。それが今回のビジョンの原点となっている。

山古志の暮らしと文化を再生し、将来へと継承していく主人公は、そこに住む村人である。そのためには、安全性や日常生活に配慮しつつ、まず早期に村に戻るためのプログラムを明確にする必要がある。

そしてさらに言えば、単に復旧にとどまらず住民が将来への希望をもてる、新たな地域づくりのビジョンや計画が不可欠だと考える。そのためには、基盤の再生とともに、地域産業・経済、生活・コミュニティの再生を連動させ、自然と生きる山古志の暮らしから無理なく広がる、復興のプロセスと計画を策定する必要がある。

また、未曾有の被害をもたらした中越地震を、次世代に伝えることも山古志村の重要な役割となる。周辺市町村と連携しつつ、日本の中山間地を代表した情報発信も、復興計画の重要な視点と位置づけた。

本研究会では、上記の視点にたって、新潟の多分野を代表する委員の議論を通して、この「山古志復興新ビジョン」をとりまとめ、山古志村をはじめ、世界に問うものである。

復興計画は策定されて終わるものではない。その計画に基づく新たな地域づくりを始めることで、山古志村周辺地域は再生の途につくが、真の再生のためには、継続的な地域づくりに取り組んでいく必要がある。そうした継続的な活動を担保していくためにも、この地域に官民の広範囲なネットワークを形成していく必要がある。

このビジョンをもとに、山古志及び周辺地域において、新たな地域づくりのための支援体制やネットワークが生み出されることを期待する。そして、本研究会では、今後もそうした動きをしっかりとサポートしていきたいと考える。

平成 17 年 3 月